

太陽曆圖解

二五

2194

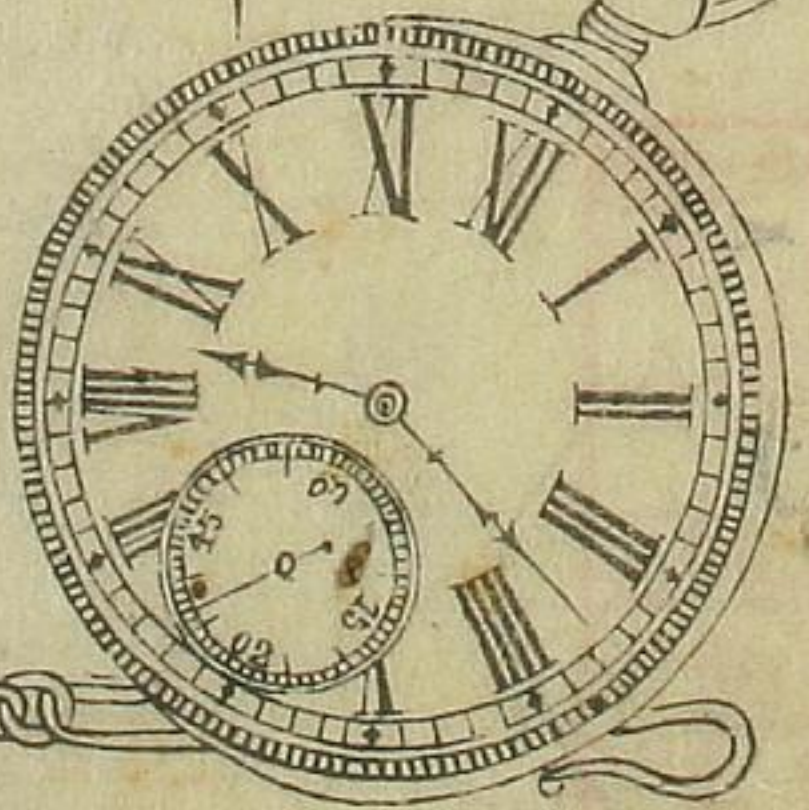


二
2194

橋小貫一著

太陽曆圖解

松園藏板



10-7-5

門 二 五
號 2194
卷

太陽曆圖解

昭和十年五月五日
講求

太陽曆圖解

十月三十一日

八月三十一日

五月三十一日

六月三十日

東京

橋爪貫一

註解

矢部櫃書

抑も地球を一周すは一日ならず一昼夜即ち一日ならず
又太陽を一周すは公轉と云ふ此一周す
其間の日数ハ三百六十五日と六時五分五十八
分五十九秒あり
又身渡り時と定り此三百六十五日ハ太陽
曆の一年と定めこれを平年と云ふ即ち明治六
年之あり又此選用カ来りハ太陽曆ハ太陽

元と一と立ると路も太陽曆も太陽元と一と
立ると一と故も最も正しき曆とりよる

月の大小

一年三百六十五日と十二月より左の如し

一月三十一日 二月二十八日

三月三十一日 四月三十日

五月三十一日 六月三十日

七月三十一日 八月三十一日

九月三十日 十月三十一日



十一月三十日 十二月三十一日

前の如く月々の日数を極めたる年々歳々更なる
夏より依てい春夏秋冬寒暖に至る迄毎年同
様し何月幾日といへば丁度去年の其日と
同一時候して諸事萬端都合すき事なり又
此月毎の大小を早く覚ゆる数あり
一五三七八十也十二月日数三十一日と知れ
二月の廿八日四六九と十一月の日数三十
又年々残りたる地の六時の四年目より四六二

十四時積り一日とたり故必らば四年目より
 此一日を平年の三百六十五日へ加へて三百六
 十六日と定め之を壬午と然らば太陰曆
 此如く二解の数を増し何れに只平年の二月
 二十八日へ一日加へて二月二十九日とする
 のより其外の月毎此日数へ更なる事あり
 壬午の四年は一度その時ハ二月の末より一日を
 増し
 日水
 とありハ一月の一日ハ七曜日の中の水曜日と當

此の事あり以下相同し又西洋に於て之
 と一週日とりハ諸借貸及ひ其他の約定等の時
 限も皆之を以て我國毎月の晦日迄以て諸限
 とす此の如く七曜日の次の如く

- 日曜日 月曜日 火曜日 水曜日
- 木曜日 金曜日 土曜日

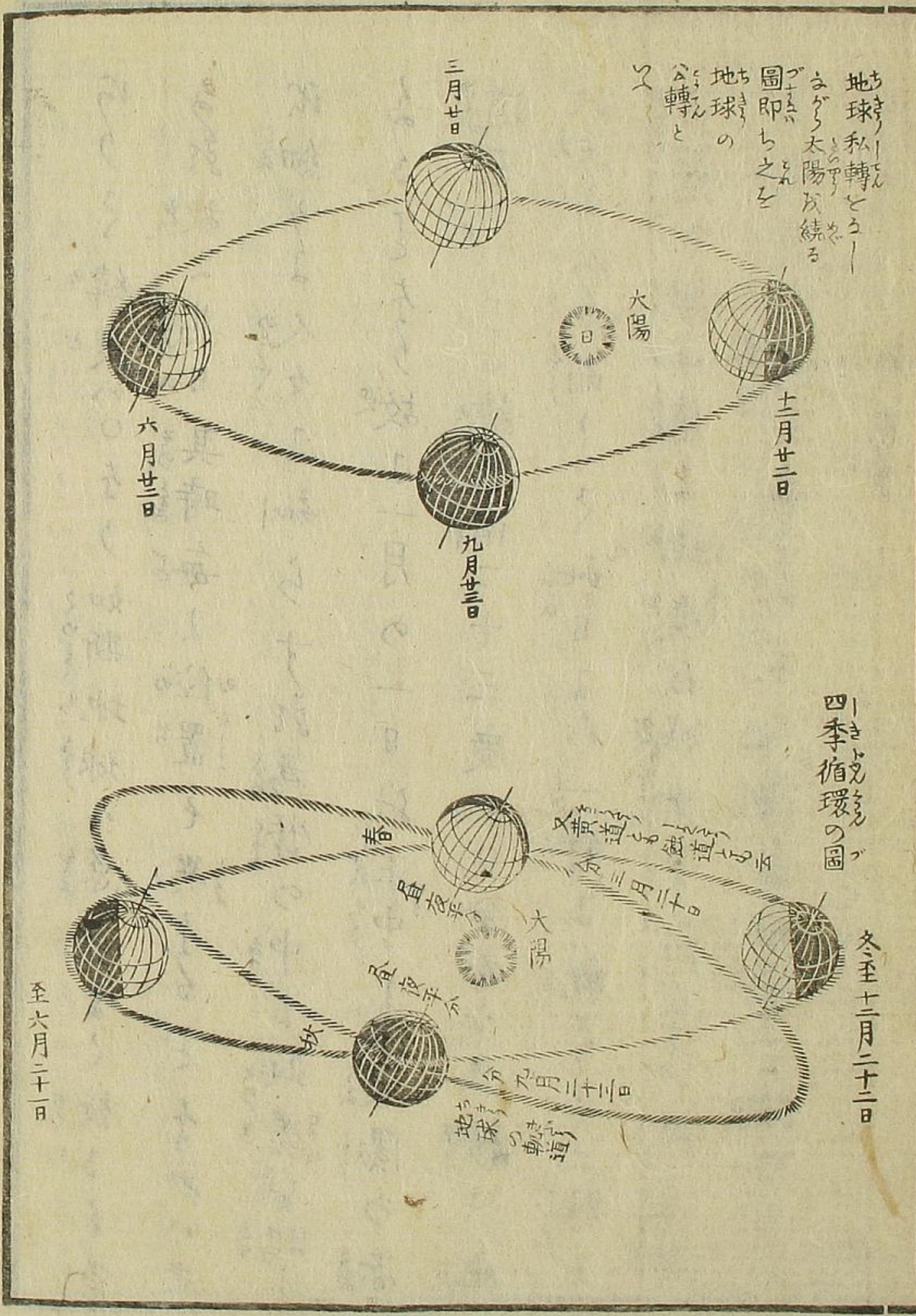
之の順序を知る歌あり

七曜を日月火水木金土初め返り又週をたり

日赤緯南二三度。〇分五二秒

地球の軸を軌道の軸と一十三度二十八分の斜
 度なるして太陽と繞る故に太陽の地球と照らんと
 一於るの毎日其方向と異る故に六月二十一日より
 太陽尤も北に近づくと夏至
 此時より太陽北緯度二十三度二十七分二十二秒の地の上
 より又十二月の二十二日より太陽尤も南に近づくと
 冬至
 曆の中より冬至と
 一より此時より太陽南緯度二十
 三度二十七分二十三秒の地の上より又此夏至と冬至の
 中央と春分又秋分より此時より太陽赤道の地の上より

より緯度ハ〇をり如斯地球ハ急りなく旋るもの
 多故に其日其時毎に位置を異なることをなれハ之
 細く人々を知らず為曆の中は此差を記し
 一あることをり故に一月の一日は正中より太陽の赤
 道を去ること緯度南二十三度〇〇分五十二秒は地
 球の上よりあり而して此日より一時は就く十二秒と
 小数四宛次第に緯度減減少す故なり此の次第
 一緯度減減まはるるけり太陽より北の方へ
 近づき故なり



一時差一二秒四減

一月一日より一時毎十二秒と小数四宛次第

緯度を減少す所なり猶前條と見合ふべし

視半至一六分一八秒

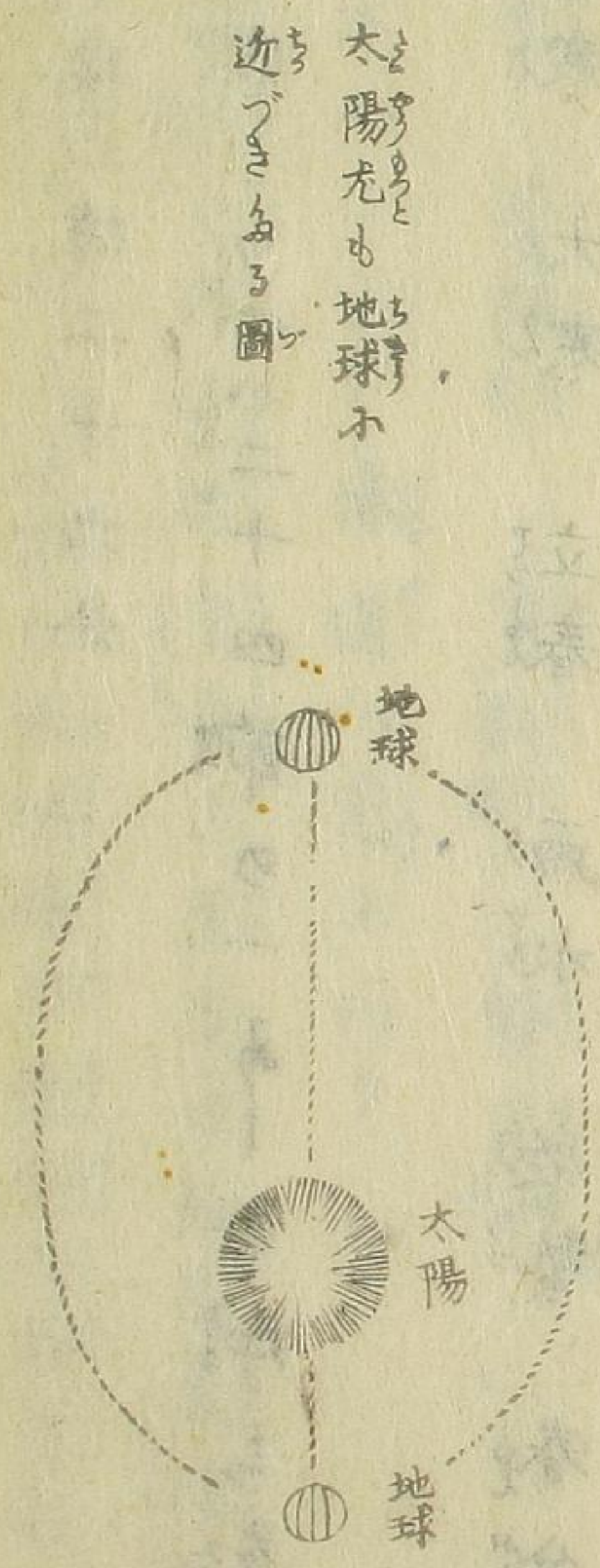
一月一日の午中に於て太陽の直至の半徑八十六分十八秒ありといふとなり又太陽の地球に近づくと時其形大きく見ゆ故に度数多し又遠ざかると時其形小さく見ゆ故に度数少くあると知り

日最昇午前五時五分

地球は太陽を繞る軌道の正圓より僅く楕圓形を成し又太陽を軌道の中央より偏側より向るものあり地球は一週する間に太陽より近くなることあり又遠くなることあり一月の二日の午前五時五分より地球と太陽と近づきたる時ありといふことあり

午前夜の予は此刻より昼の午は此刻に至る迄を云ふなり又午前より後昇るといふなり
 五時五分是迄の太陽曆より於るる昼夜を分け

十二時とを以て垂を太陽曆より於るる昼夜は二十四時とし其一時は六十より其一ツを一分時とし又此一分時を六十より其一ツを一秒時とし又故より五時五分より一時は六十より其一ツを五ツとしといふことあり



太陽尤も地球に近づきたる圖

小寒午後二時二十六分

此小寒とつひハ二十四節の一あり即ち左の如

小寒 大寒 立春 雨水 啟蟄 春分

清明 穀雨 立夏 小滿 芒種 夏至

小暑 大暑 立秋 處暑 白露 秋分

寒露 霜降 立冬 小雪 大雪 冬至

地球太陽と繞ぶの軌道と十二の平分一之之成
十二宮とつひ四季に従ひく四ツの差別あり左の

如

春宮 白羊 分春 金牛 兩穀 雙魚 小滿

夏宮 巨蟹 至夏 獅子 大暑 室女 處暑

右の六宮ハ赤道北より

秋宮 天秤 分秋 天蠍 降霜 人馬 小雪

冬宮 磨羯 至冬 寶瓶 大寒 雙兄 雨水

右の六宮ハ赤道の南より

地球各々乃宮の中央に至るを太陽曆

其月の中とす即ち大寒雨水春分の如き成り

又地球繞ル其宮を換る時或太陰曆より其某の月節と云ふ即ち小寒立春啓蟄の如きあり

午後二時二十六分 午後といふ昼の午刻より夜の子の刻に至る迄或いふ又午後のことと降ともいふなり又二時二十六分といふ前を説明せし如く二時と又一時を六十と割たりそのを二十六ありといふことなり

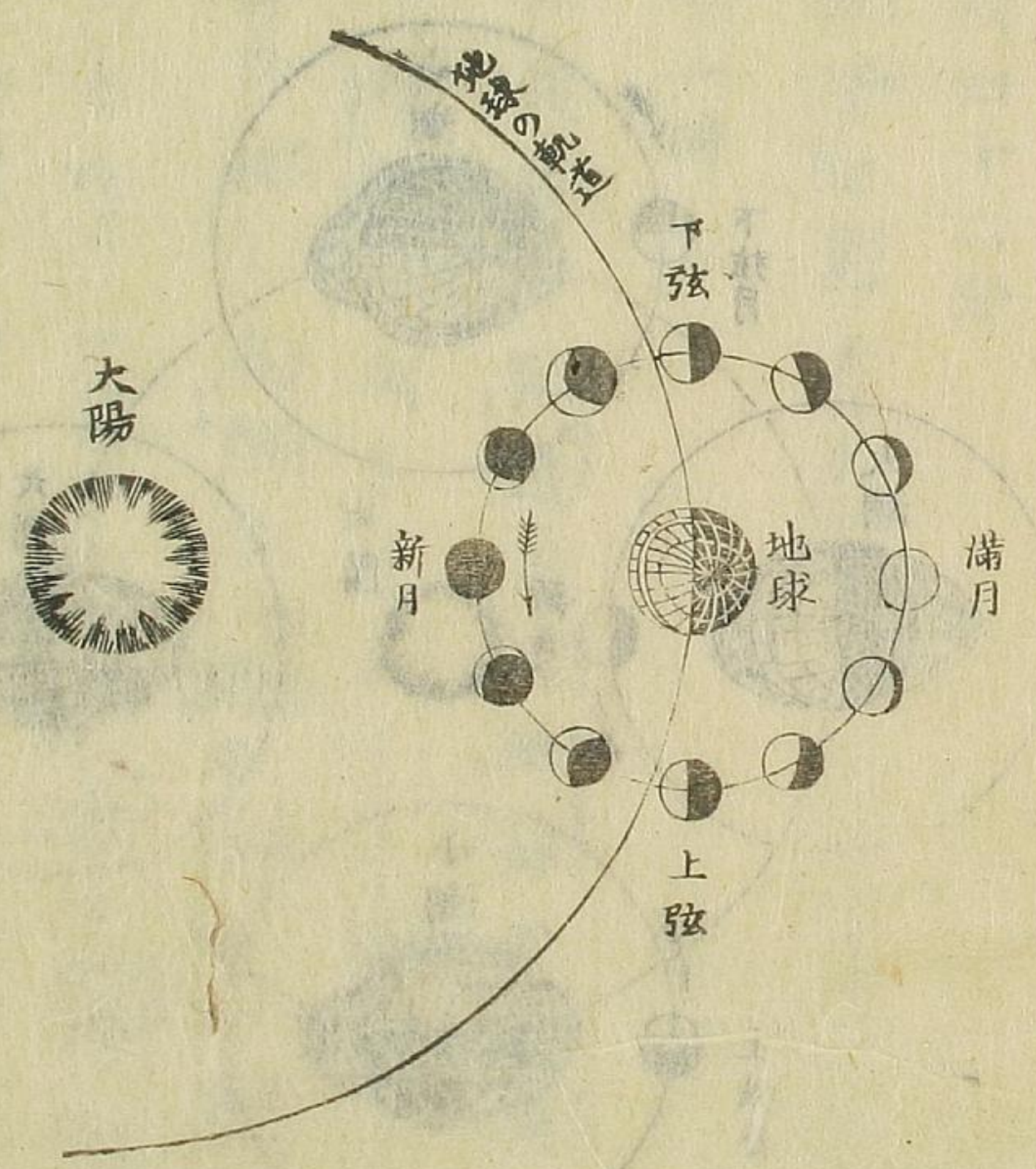
日出午前七時十分 日入午後四時五十分
一月の五日より太陽午前の七時十分より出く午後

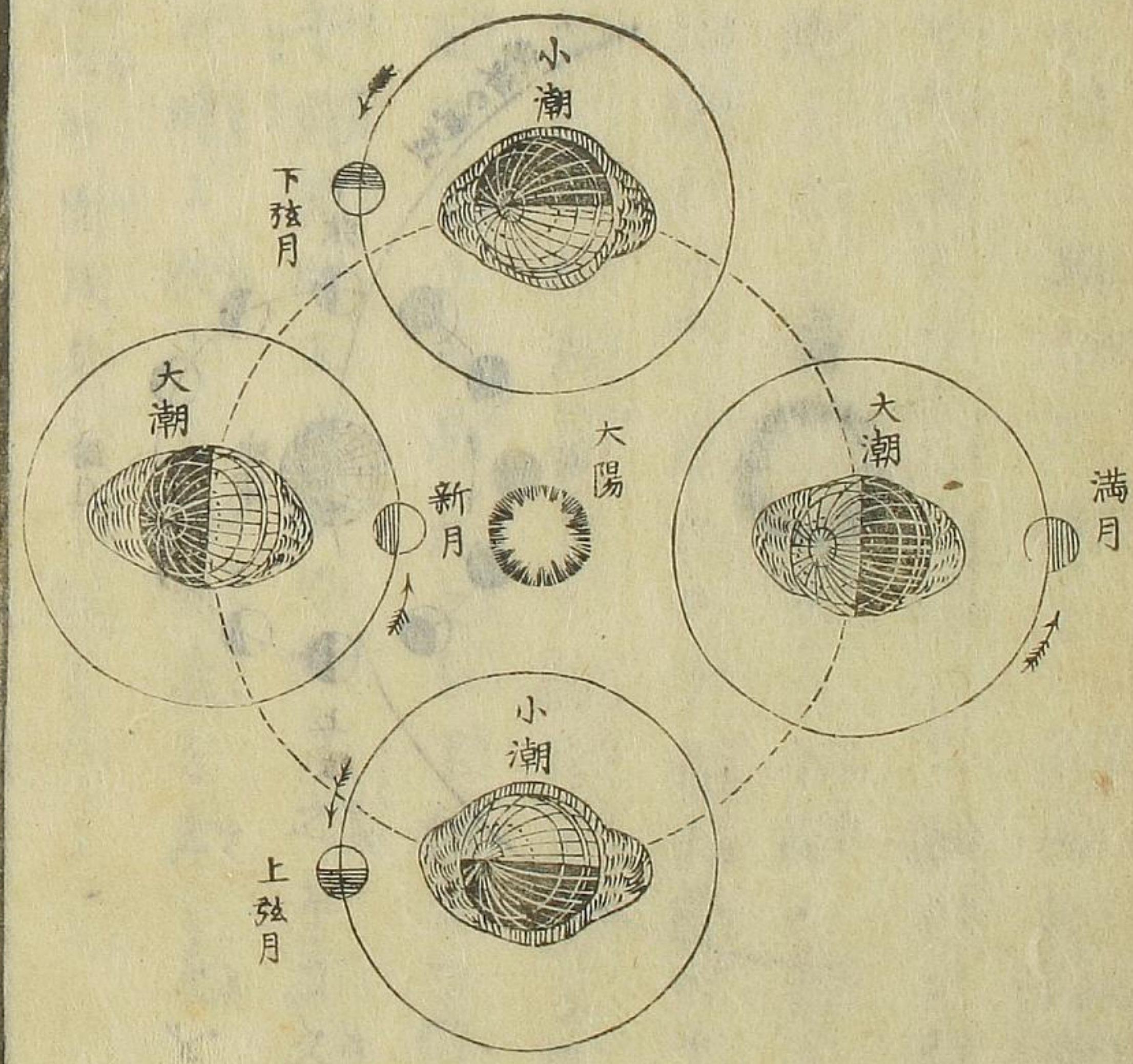
の四時五十分より没するといふことなり

上弦午前六時四十六分

太陽を地球が繞るその一周の間に必ず其形を盈虧ありとあり故に其繞る間に太陽と地球の間を来り去りたる其太陽の面全く暗し是れ新月と云ふ一月二十九日午前三時四十分の如き之あり又之を反して地球太陽と太陽の間を来れば太陽の面全く光りなり之れ満月といふ一月十四日午前一時四十二分の如き是なり

又新月の時と満月の時より必ら海面最も
 高し之と大潮と云ふ又新月より満月に至る間
 其繞り方より於る太陰の半面乃光り見
 る之故上弦より一月六日午前六時四十六分
 此如き之なり又満月より新月に至るの間太
 陰乃半面の光り見ぬ之を下弦と云ふ一月二
 十二日午前五時五十分の如き之なり又上弦
 と下弦の時より於る海面最も卑し之と小潮
 と云ふ猶次の圖を見たり詳し





満月午前一時四十二分

上弦の條下を見よ

月最高午前十一時

太陽の地球を繞る軌道を又地球の太陽を繞る
 軌道の如く橢圓形をなす地球の太陽を繞る
 乃偏側よりなり故に太陽の一周の間最も地球
 より遠ざかうとより一月十六日午前十一時の如き之
 り又最も地球より近づくるとより一月二十九日
 前十一時の如き之なり

下弦午前五時五十分

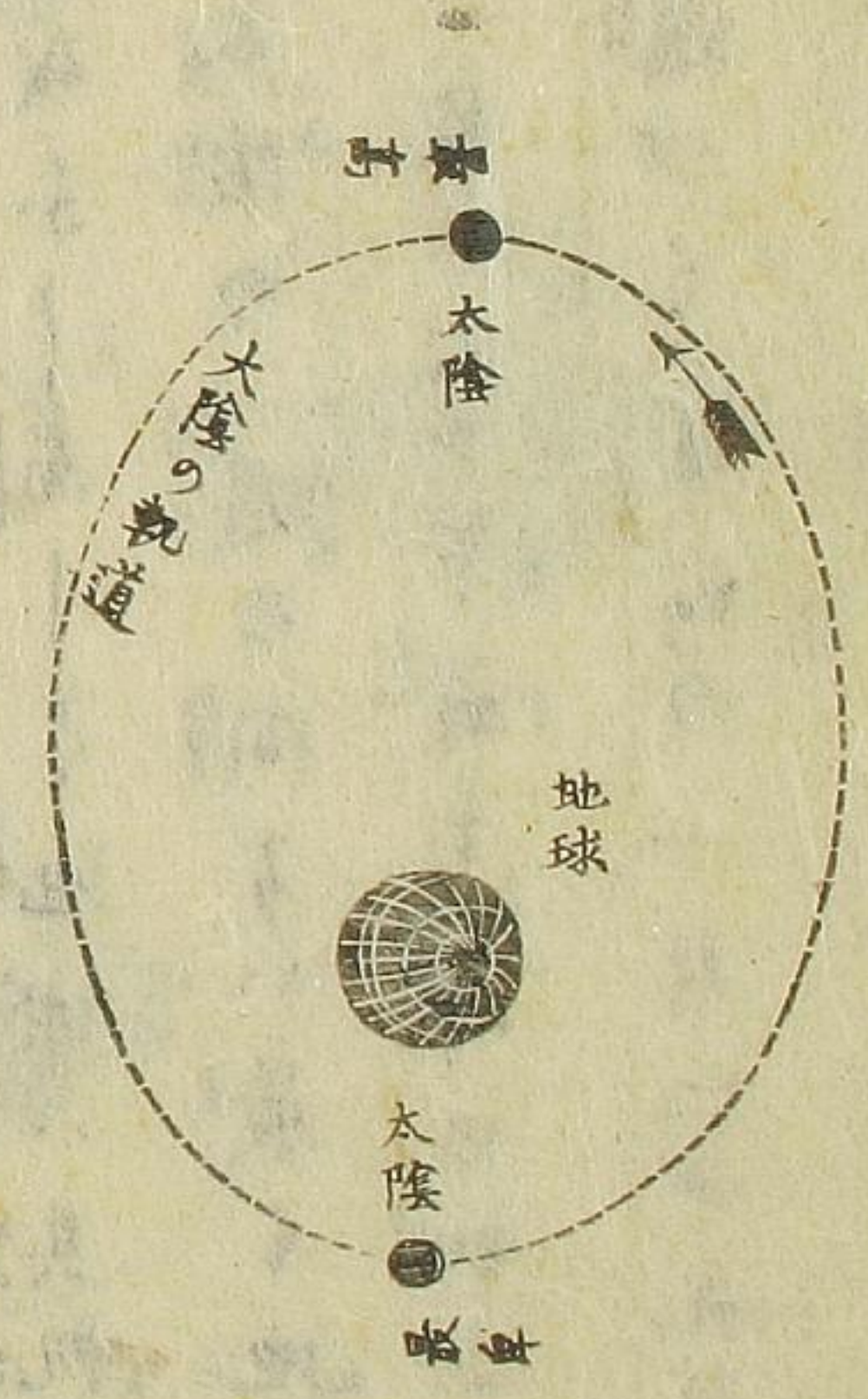
之ハ上弦此條下弦見れぬ

新月午前二時四十六分

之ハ上弦の條下弦見れぬ

併し日の曆の朔日ハ此日なり

月食皆既



地球と太陽の間は太陽の来り而して太陽の光
が成りて来りて之は日蝕なり故に日蝕ハ必ら

は新月の時より事知るなり又太陽と太陽の

間地球繞り来りて太陽の光りと遮りて之

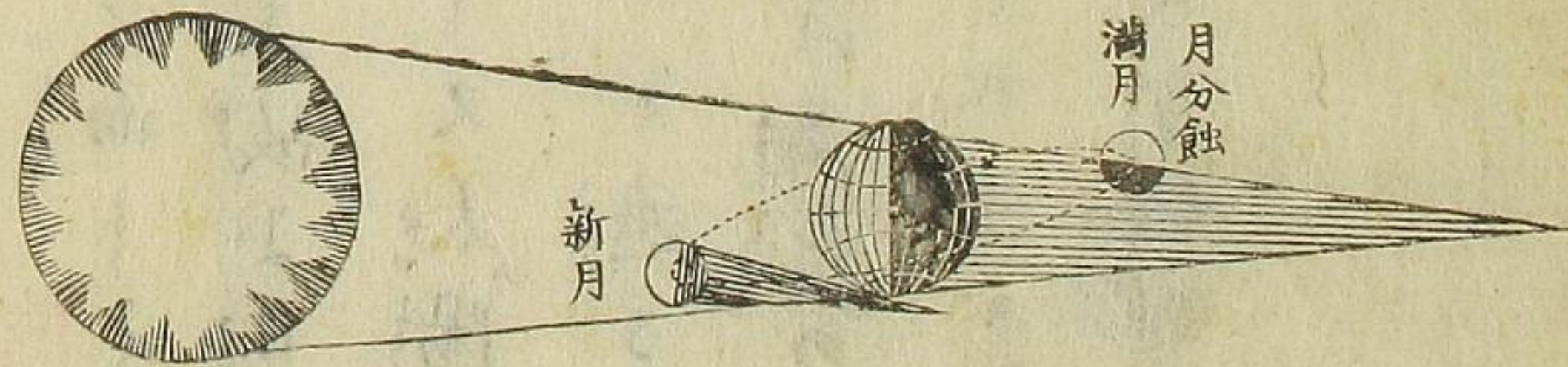
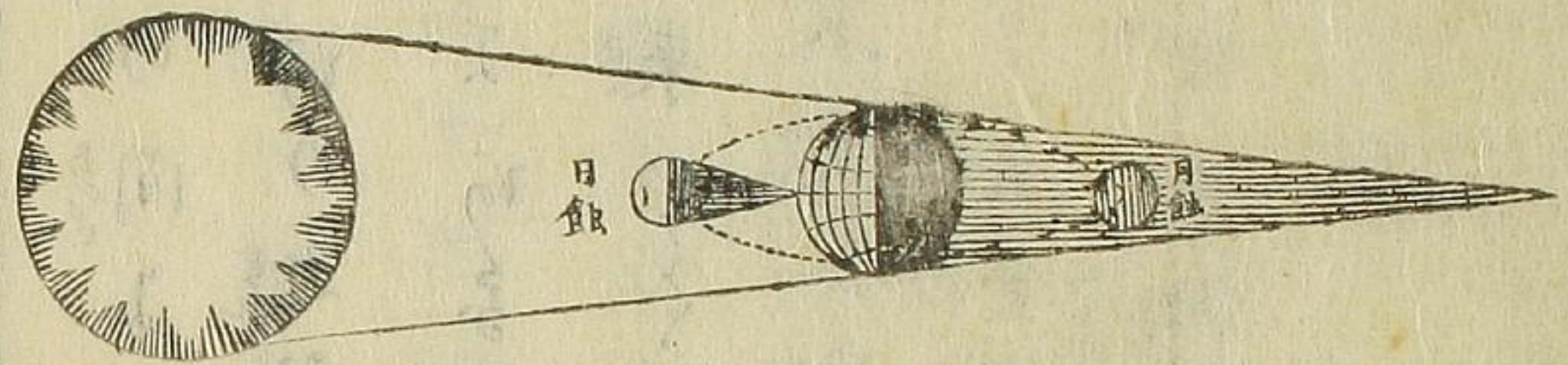
は月蝕なり故に月蝕ハ必ら満月の時より

事と知るなり又全蝕と分蝕との事ハ全く相

重なりと一分の相重なりとより出来ると

なり





各處時差表

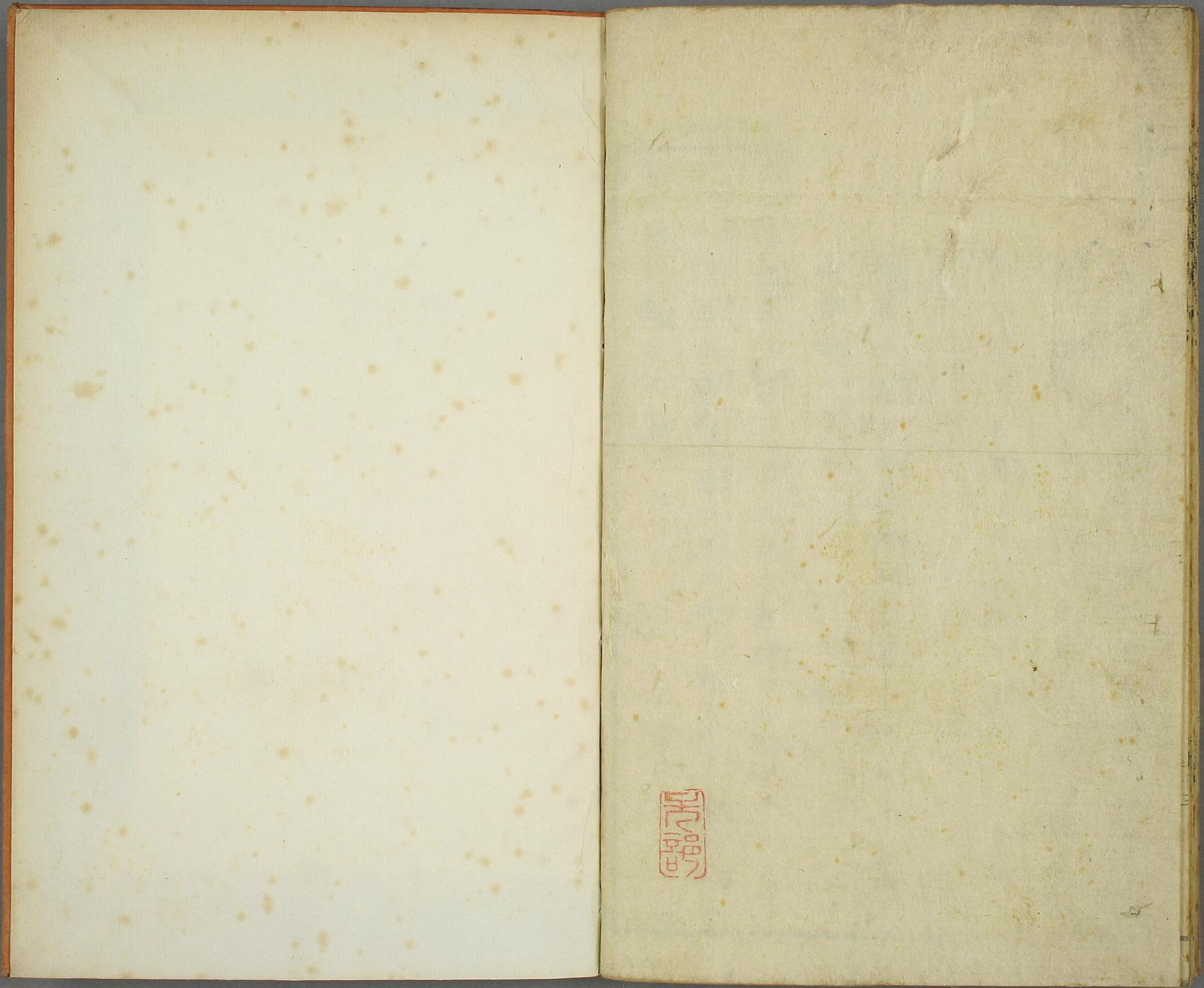
東京の時刻を太陽曆中ニ悉く記されども
 地球を西より東の方へ旋るものなる故に西の方へ
 ゆく程夜は明るとも遅く日の暮るるとも
 又遅し又東の方へ往りを夜の明るとも早く日の
 暮るるとも早し故に東京の時刻より東北なる箱館
 の時刻ハ早き故に東京の時刻へ箱館の下に記し
 たる時刻を加へ之を箱館の時刻と知る為に設

られたるを其の他減するを此道理あり

第十月奴操り下け右側乃第三月奴横一操り兩層
交ちろ所二於之 一五一 即ち百五十一日と得是
り十五日と十日の差五日奴減一 百四十六日と
と知る魚一

求むる所乃日數の内二閏年の第二月ありと死を
更二一日奴加ふ可一
求むる處は日數一ヶ年二過る時ハ三百六十五日奴
加ふ又二ヶ年二過る時ハ三百六十五日の二倍奴加ふ
余ハ之二准む可一

雄松堂書店	
神田・神保町	
書名	大陽曆同解
賣價	4
受入	No.
	シ



THE UNIVERSITY OF CHICAGO

